

## あ と が き

どういう巡り合わせか、本年度から編集委員長という大役が回ってきた。石井先生の会長就任による玉突き人事のようにもみえるが、平成11年度の編集委員会に所用で欠席したために？、副委員長に選出されていた身としては、非常事態である。絶対に避けたい役職ではあったが、「評議会で決まった」？との天の声に、引き受けざるを得なくなった。歴代委員長に比して明らかに力不足である。とは言え、私以上に委員歴の長い石田先生や田中先生をはじめ、各分野を代表する研究者が編集委員に加わっておられ、事務局のサポートも手厚いのが唯一の慰めと言えようか。

編集委員会に課せられた最大の役回りは、前年度に行われた総合学術調査の報告書である阿波学会紀要を、次年度の結団式までに発行することである。しかし、そうした作業が私の能力を超えていることから、今回は最初から完全分担制に踏み切った。すなわち、提出された原稿については各編集委員が2～3本を分担査読し、受理の採否についても委員にお任せした。判断に困るものについては、編集委員会での合議制で採否を決定した。そのために、編集委員には多忙な中、11・1・2・4月に4回集まっていた。この間、執筆者に対しても、これまで編集委員会の内部資料としていた査読基準ならびに査読レポートを送り、原稿の執筆・修正にご協力いただけるよう配慮した。

編集委員会では、基本的に、原稿の記述内容は執筆者の責任に帰すると考えているが、記述がオリジナルなデータにもとづく内容であるか、あるいは投稿規定に則しているかを、おもに査読の基準に置いている。しかし、委員長の不慣れや査読・編集の時間的制約などから、各執筆者への原稿修正の依頼が曖昧で、ご迷惑をおかけしたであろうことも十分に拝察される。この点で、学会員各位にはお詫び申し上げるとともに、今後ともいっそうのご理解とご協力をお願いしたい。

なお、平成13年度（第48号、佐那河内村）より、紀要の判型がA4判に変更される。第34号（板野町、昭和62年度）までがA5判、第35号（上那賀町）以降はB5判の体裁をとってきたが、B5判はこの第47号（相生町）が最後となる。B5判への移行時には、編集委員会が初めて組織されている。21世紀を迎え、編集委員会としても、阿波学会の発展ならびに紀要のリニューアルに少しでも寄与できればと願っている。

（平井 松午）

### 阿波学会編集委員会

委員長	平井 松午	副委員長	石田 啓祐			
委員	田中 省造	大川 健次	小川 誠	田村 栄二		
	名倉 佳之	伴 恒信	山本 茂	和田 賢次		